

平成31年2月4日（月）に、本校会議室において「第3回学校関係者評価委員会」を開催いたしました。つきましては、その報告をいたします。

## 1 開催の趣旨

- (1) 授業・施設参観等を通して学校評議員の方々に学校の様子を知っていただく。
- (2) 各評価対象から本年度の実践等について報告し、今後の課題についてご指導を受ける。

## 2 本年度の取組の最終報告

### 《授業改善に向けた取組》

教科	重点目標	具体的方策	留意事項
国語	○理解し、使いこなせる語彙を増やし、文章読解や作文の基礎的な力を伸ばす。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・漢字テストと併せて語句の意味テストを行う。</li> <li>・授業の中で、語句の意味を説明したり対義語や類義語を学習したりする機会を設け、語彙の拡充を図る。</li> <li>・生徒の実態に応じて、辞書の引き方やノートへの書き方、板書の視写の仕方、小テストに向けた勉強の仕方などを指導する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・中学部、高等部全学年共通で取り組む。</li> <li>・各学年で、語句のテストの作成を行い、データの共有をして今後も活用できるようにする。</li> <li>・学習の内容を振り返り、繰り返し学習できるように小テストの内容を定期テストで出題する。</li> </ul>

### 最 終 報 告

#### 中学部

- 中1→もともと語彙力が豊富な生徒には、拡充の助けになった。語句の用法の説明やテストを行うと、添削するだけよりも記憶を強化できる手応えがあった。
- 中2→語句の意味理解をおさえた上で単元に入ると、スムーズに学習が進んだ。辞書を活用できる場面が増えた。
- 中3→漢字学習への習慣が身に付いてきた。生徒が主体的に語句の意味や用法を説明することができた。支援が必要な生徒へは、説明や用法の選択肢を提示することで、語句の意味に関心をもって説明をすることができた。

#### 高等部

- 高1→語句の意味テストは月に一度行っている。テストに向けての勉強はコンスタントに取り組んでいる。基礎学力がある生徒には効果的だった。
- 高2→難解語句は、生徒が主体的に辞書を引いて調べることができている。短文作りで語句の意味理解の定着を図ることができた。
- 高3→意味テストの出題形式を2学期から変更した。文脈での用法を考え、（ ）に適切な語句を入れていく方法だが、粘り強く考えて取り組む生徒が増えた。漢字テスト、意味テスト、定期テストの流れが見通せるようになり、学習習慣が身に付いてきた。

#### 高等部専攻科

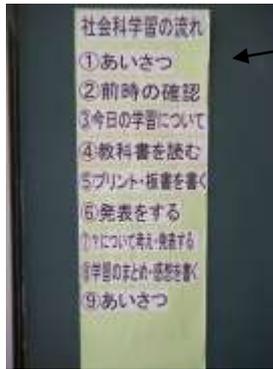
- 専1→小テストは夏季休業中の課題を中心に出题し、繰り返し学習することで徐々に理解したり覚えたりすることが増えた。そのため、苦手な分野の学習も主体的に取り組めるようになった。
- 専2→副教材から生徒が語句を選び、短作文を書く。短作文を授業で添削し、語句の用法について解説をする。学習した語句の意味や用法を定期テストで出題している。言葉に興味をもち、作文や俳句作りでは意味や用法を調べて使用するようになった。語句理解の学習への抵抗が少なくなった。

### 今 後 の 課 題

- ① 問題作成様式について  
来年度に向けて、今年度の実施状況など反省を踏まえ、意味テストの作成の観点や、問題数、問題形式などを検討、改善しデータを蓄積していく。
- ② 今回の取組では、成果と課題が大きく分かれた。支援が必要な生徒へは、語句の意味の学習は効果が薄く、継続的な実施を迷う意見も出された。逆にうまくいった例は、語句単独の学習ではなく用法や短文作りなどを積極的に行っていることが示された。
- ③ 優れた実践の共有、指導方法の改善の検討等

教科	重点目標	具体的方策	留意事項
地歴公民	・主体的に学び、考える力を育てる授業を目指す。	①生徒が主体的に学ぶことができるようにするために、1時間の授業の流れを明確にする。 ②話し合いがスムーズにいくために、話し合う視点を絞る。 ③ペア交流等話し合う環境を整える。 ④授業で使うプリントを工夫する。	・授業の流れが視覚的に分かるような掲示を行う。 ・話し合うための発問を工夫する。 ・ペア交流等の話し合いの仕方を指導する。 ・月に1回程度科会を開き、授業や生徒等の情報交換を行う。

最 終 報 告



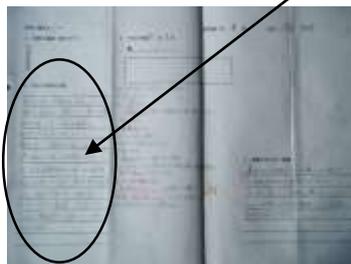
①について  
授業の流れが視覚的に分かるような掲示を使用することで、生徒一人一人が授業の流れを理解して、授業に臨むようになった。

②について  
話し合うための発問を工夫して授業を行っているが、話し合うところまではいかず、発表をするだけになっている。仲間の意見に付け足して発言できるような工夫が必要である。

③について  
話し合い方のモデル授業や話し方(話形)を指導していくことが大切である。

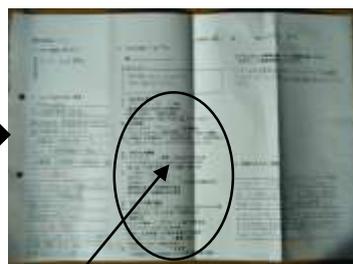
④について  
生徒の実態に合わせて、授業プリントを工夫することで、家庭で予習を行い、授業にも主体的に取り組むようになってきた。

< 高等部1年で使用 >



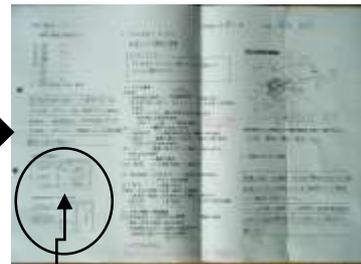
< 1学期のプリント >

・授業での板書を写す形のもの



< 2学期のプリント >

・授業の板書のところが、空欄穴埋めにしてあるもの。  
・右上に話し合う発問が書いてある。



< 3学期のプリント >

・予習のところを削り、授業に関わる資料を載せた。

今 後 の 課 題

- ① 生徒が主体的に学ぶための具体的な方策をさらに考えて、授業改善に取り組む。
- ② 考える足場を作るための資料や、発問の工夫をしていく必要がある。
- ③ 1時間の中で話し合いができる場面を作り、具体的な発問を工夫して授業を進める。
- ④ 授業改善に向けた教師間の授業参観を行う。

教科	重点目標	具体的方策	留意事項
数学	<p>○解を導く過程を的確に理解し、類題に積極的に取り組む態度を養う。</p> <p>○習得したことを説明する力を培うように働きかける。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学習内容を理解する上で効果的であった視覚的な教材やその提示の仕方について、継続的に情報交換をする。</li> <li>・日々の授業の中で、仲間とともに課題を解決したり、考え方を共有したりする場面を日常的に設定する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・卒業後に求められる数学に関する基礎基本を教員間で共通理解した上で日々の指導にあたる。</li> <li>・数学用語に関する手話表現を統一し、生徒がスムーズに学習内容を理解できるようにする。</li> <li>・定理等の応用の仕方や接続詞等の使い方にも注目し例題等の解法を的確に読み取ることができるようにする。</li> </ul>

最 終 報 告

- ①練習問題に取り組むときに、生徒自身が板書して、自分なりの言葉で説明する場面を必要に応じて設定した。  
 ⇨教師が行うように、色チョークを使いながら説明し、他の生徒が理解できているか気にかけることができる生徒も出てきた。
- ②教科書の例題を書く宿題を課し、予習する習慣をつけるとともに、例題の解説や、分からない所を授業の中で発表することを継続して取り組んだ。  
 ⇨教科書の言葉(数学用語)や言い回しを使って発表する姿が多くなった。また、事前に一度目を通してあることで授業内容を理解するための一助になっているケースも多くなった。
- ③プレゼンテーション形式で授業を展開することを基本とした。また、必要に応じて、生徒にも同じスライドを印刷したものを配布した。  
 ⇨教師が長い時間をかけて板書する必要がなくなり、生徒が練習問題に取り組む時間を多く取ることができた。
- ④建物の高さを予想する際に、手作りの角度測定器を用意して、単元「三角比」で学習したことを生かした。  
 ⇨簡単な道具で建物の大体の高さを考えることができ生徒たちは驚きを感じていた。

今 後 の 課 題

- ①聞き手を意識した発言等を引き続き心がけるように働きかける。
- ②自分で読む⇨理解する⇨応用するという一連の流れを意識することでさらに学びを広げられるよう、読解力を育むための支援の在り方を今後とも模索していく。
- ③タブレット端末等の有効な活用方法について、引き続き研究していく。
- ④数学の苦手な生徒も、グループワークの中で数学の得意な人に助けをもらいながら授業に前向きに参加できるように、授業展開を工夫する。
- ⑤指導方法についての情報交換の意味で、教員間の授業参観を継続する。
- ⑥実用数学検定問題などの客観的な指標となりうるものを定期的に利用して、生徒の実態把握に努める。

教科	重点目標	具体的方策	留意事項
理科	○生徒が知識を増やし理解を深める指導法の確立を目指す。	<ul style="list-style-type: none"> <li>科学的な研究を参考に指導法を改善し実践する。</li> <li>既習学習を繰り返し確認する。また、生徒が教科書の内容を説明したり、確認テストを頻繁に行うなどアウトプットできる機会を多くつくる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>指導の効果については同形式で行うテストの点数の変化で確認する。</li> <li>授業の進度が遅れないようにする。</li> </ul>

### 最 終 報 告

中間報告の後、参考になる実践例はないか探した。灘中学高等学校の国語教師だった橋本武先生の著書「一生役立つ学ぶ力」に参考になることが書かれていた。橋本先生は中学校3年間で1冊の小説だけを教材として、そこに描かれている内容の全てを確認する授業を行っていた。それは国語であって国語だけではない授業であった。橋本先生の担当する学年では大学の合格者が増えた。これは学力を伸ばすには、国語で国語のことを教えているだけでは十分ではない。他教科も同様。教科の横のつながりを意識しなければならない（または実生活と結びつけなければならない）ということをお話しているのだろう。以降、授業では、教科書に書かれていることの理解を確認しながら、教科書に書かれている内容を他教科との繋がりや実生活と結び付けることを意識して授業を行った。

#### 実践した例

地学の教科書に「ニュートンは1687年、地球は赤道が長い回転楕円体であるとした。」と書かれている。読むことは簡単であるが、その内容について、ニュートンのことを調べることはもとより、1687年日本は何時代の何文化のときか。誰が活躍していたか。回転楕円体とはどのようなものか。など他教科の学習と結び付けることを積極的に行った。

#### 結果

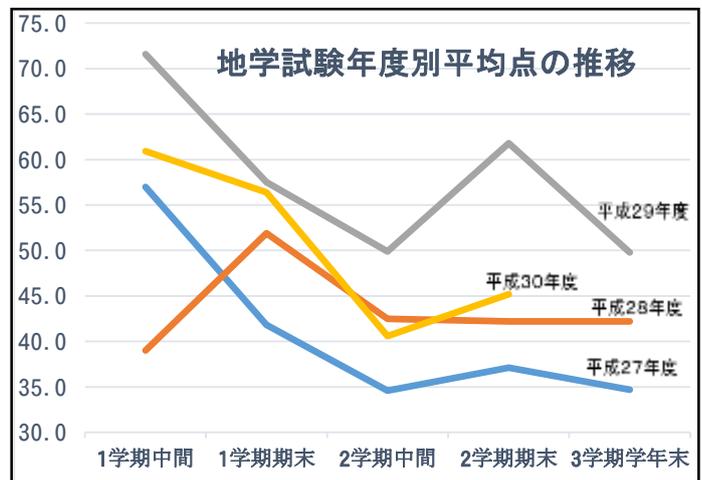
この学習方法に興味をもつ生徒も現れたが、理科の授業で理科以外のことを行う必要があるのかと考える生徒もいた。

また、中学部では学習内容を生徒が発表する取り組みを行い、その中で理科だけの学習ではない国語の文章力の必要性を感じる生徒がいた。

生徒の成績については、期待したような向上は認められなかった。

右グラフは4年間の高等部1年生で行う地学基礎の試験の年度別平均点の推移を表している。

横軸は1学期、2学期、3学期の中間期末の各考査という時間的経過、縦軸は点数を表す。各年度、同じような傾向がある。最初によく、夏休み明けの中間考査まで点数が低下して、2学期末の試験で少し点数が上昇している。このことから、高等部に入学したては学習意欲が高いが、学校生活に慣れるにしたがい学習意欲が低下し、文化祭後、多少学習意欲が高まったことを示している。本年度も同様の傾向が続いており、授業改善による成績の変化が現れているわけではないことを示している。今のところ指導が試験結果になかなか反映されないが、この指導方法を長期的に実践し学力(生きる力)につなげていきたい。また本年度、3学期末の試験で例年のとは違う傾向になることを期待したい。



#### 成果

短期的には授業実践が試験の結果に結び付かなかったが、職員の意識が変化した。さまざまな視点から学力を考えることができ、学力の向上を意識しながら授業改善を行うことができた。

### 今 後 の 課 題

理科以外のことも学習する授業方法に納得していない生徒には、その必要性を繰り返し説明していきたい。そうすることで、生徒の学習に対する意欲も変化するのはないかと期待する。

また、範囲を広げて授業の予習を行うなど教師のバックグラウンドを広げる必要を感じている。

教科	重点目標	具体的方策	留意事項
外国語	○英語の語彙力向上を図り、基礎的な言語力の拡充を目指す。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学校独自にレベル分けした英単語テストを作成し、各授業内で定期的実施する。その際、単語の意味、発音だけでなく、一般動詞の三単現や過去形など、語形変化も出題する。</li> <li>・テスト結果を振り返り、生徒が自分に適したレベルのテストに挑戦できるようにする。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学部ごとに英検や大学入試対策など、用途に応じてレベル調整ができるようにする。</li> <li>・英語の語彙力を英文の読解力へ結び付けることができるよう、英文を読む問題に取り組む時間も確保する。</li> <li>・1～2か月に1回科会を開き、情報交換をする。</li> </ul>

### 最 終 報 告

#### ①テストの実施について

- ・英語の授業がある生徒（中学部1年～専攻科1年）を対象に、中1～中2までの学習範囲の内容での検定問題を実施した。（平均点、各項目での平均点は下表参照。）
- ・各学部の比較では、母数の違いがあり一概に比較できないが、高等部本科、専攻科の生徒よりも、中学部の生徒の平均点が上回っていた。

表1 各学部の平均点

	中学部(17人)	高等部(48人)	専攻科(19人)	全体(84人)
平均点	69.8	66.8	66.1	67.3

- ・全般的に、語形変化の問題において、困難さを抱える生徒が多かった。また、スペルの正誤問題においても、意味の理解と比べると、覚えにくさを感じている生徒が多かった。

表2 各部門の平均点

	英⇒日	日⇒英	語形変化	スペル	発音
平均点 (満点:20点)	15.1	15.7	10.7	11.8	13.9

#### ②結果の振り返りについて

- ・受検生徒に対しては、検定とともに結果分析表を配付し、それぞれの結果に合わせたコメントや簡単な勉強方法を伝えるようにした。必要に応じて検定問題の解説も行うようにした。
- ・検定結果に驚き、英単語を再度勉強しないといけないという危機感を抱く生徒が見られた。

#### ③今回の取組を通じて

- ・中学部で培った英単語の力を、高等部においても維持できるような体制づくりが必要であること、また、既習の英文法を定期的に確認する機会が必要であることから、今回実施したような英単語力検定の定期的な実施を目指し、問題作成や改訂を進めていきたい。
- ・普段の授業においても、今回の結果を受けて、語形変化やスペルの確認にも説明の時間を今以上に作り、英語の理解力の向上に努めていきたい。

### 今 後 の 課 題

#### ① 問題作成様式について

(現在はwordにて作成。作成の自動化を目標に、Excelへの移行方法を検討する。)

- ② 問題作成頻度について (年に1回、初級、中級、上級ともに検定問題を1つ作成する。)
- ③ 検定実施時期、検定時間の確保
- ④ 検定後の展開について、結果の活用や、どのような方法で定着を目指すのか検討する。
- ⑤ 将来的な教育課程編成も視野に入れた、外国語の授業時間確保について検討する。
- ⑥ 生徒が過度の負担にならない程度で、家庭でも継続してできるような課題について検討する。

《いじめ防止に向けた取組》

重点目標	具体的方策	留意事項
<p>○いじめの早期発見に努める。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・情報集約担当（生徒指導主事）が、生徒情報を文章化した「週報」を作成し、関係する教員と共有することで、生徒の状況を把握しやすくする。</li> <li>・担任が一人で悩まないように、養護教諭や相談担当と連携し、「保健室」や「心の相談室」の活用を促す。</li> <li>・「週報」を活用し、生徒指導主事、相談担当、養護教諭等で意見交換する場を週に1回設ける。</li> <li>・年3回いじめ不登校対策委員会（定期）を開き、いじめ問題に組織的に取り組むための「いじめ防止基本方針」の確認や生活アンケートの結果報告を行う。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・生徒情報を共有する際には、進捗状況を確認するとともに個人情報取扱に気を付ける。</li> <li>・学年主任を中心に、教員間の連携促進をお願いしていく。</li> <li>・教員が1人で抱え込まない環境づくり、また生徒がSOSを出せる環境づくりを職員間で意識し、教育活動にあたるように声かけをしていく。</li> </ul>
<p>最 終 報 告</p>		
<p>&lt;職員の意識向上&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・「生活アンケートをすることがいじめの早期発見にはつながらないこと」、「普段からの生徒との会話や何気ない変化を見逃さないこと」など、学年・担任を中心に生徒の様子に気を配る体制づくりに努めていくよう、いじめ不登校対策委員会や職員会議等で、声かけをしている。</li> <li>→全校集会で「相談ができる環境」「周りが気付く環境」になることが、健全な集団であることを伝え、教員だけでなく、生徒もいじめの早期発見ができる体制づくりについて考えた。また教員の意識が高まったことで、生活アンケートの修正意見がでたり、生活アンケートが面談で活用されたりした。</li> </ul> <p>&lt;生徒情報の共有&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・生徒情報は、情報集約担当（生徒指導主事）がとりまとめており、「週報」にまとめ、必要があれば学年担当者に伝えている。</li> <li>・生徒指導主事、心の相談担当（特別支援教育コーディネーター）、養護教諭、寄宿舎指導員長が毎週1回集まり、生徒情報の共有と支援方法の検討を行っている。</li> <li>→生徒情報は、管理職や生徒指導主事だけでなく、心の相談担当、養護教諭、寄宿舎指導員などに広く共有されるようになった。共有される人数が増えることで、関係職員への伝達も迅速に行うことができた。</li> </ul>		
<p>今 後 の 課 題</p>		
<ul style="list-style-type: none"> <li>・「いじめを見逃さない」という教員の意識の継続と向上のための方策を考える。</li> <li>・生徒情報の適正な管理や共有の仕方を検討する。</li> <li>・生活アンケートの質問内容を検討し、分析方法の確立をする。</li> </ul>		

《多忙化解消に向けた取組》

重点目標	具体的方策	留意事項
○仕事の効率化や在校時間の縮小に取り組みながら、教員が自己の健康管理や働き方に対する意識を高める。	<ul style="list-style-type: none"> <li>各校務分掌で業務を整理し、マニュアル化を進める。</li> <li>水曜日を部活動休養日とする。</li> <li>平常は20:00を施錠時刻とする。定時退校日は、18:00を施錠時刻とし、月3回設定する。</li> <li>施錠時刻と年休取得の統計をとり、働き方の傾向や変化を考察する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>各校務分掌のマニュアルを一つのマニュアル集にまとめ、内容を周知して有効活用する。</li> <li>有意義な時間の使い方について生徒に指導する。</li> <li>部活動を実施しない日に定時退校日を設定する。</li> <li>教頭・部主事は勤務状況を観察して個別に相談や面談を行い、長時間労働の改善や年休取得の促進を図る。</li> <li>月別、部別、校務分掌別など、多面的に考察する。</li> </ul>

最 終 報 告

- 各校務分掌で業務のマニュアル化を進めてマニュアル集を充実させるとともに、マニュアル集の目次を作成して内容を分かりやすくした。
- 週2日の部活動休養日を設定し、部活動業務を軽減した。会議を設定しやすくなった。
- 平成26年度から今年度までの施錠時刻を調べた。
  - 昨年と今年の施錠時刻別日数の比較(表1)から、→のような変化が分かる。
    - ① 昨年の19時台の日数(15%弱)が、今年の18時台とほぼ等しい。  
[理由] 定時退校日の施錠時刻を19時から18時に変えたため。
    - ② 昨年は20時00分～20時29分の日数(約40%)が最も多いが、今年は20時30分～20時59分が多くなっている。  
[理由] 21時過ぎまでの仕事は減ったが、20時で仕事を切り上げられない状況が増えた。

	17:00～ 17:59	18:00～ 18:59	19:00～ 19:59	20:00～ 20:29	20:30～ 20:59	21:00～ 21:59	22:00～
H29(202日)	0	4(2%)	29(14%)	83(41%)	46(23%)	31(15%)	9(4%)
H30(152日)	0	20(13%)	4(3%)	40(26%)	63(41%)	15(10%)	10(7%)

- 過去3年間の月別平均施錠時刻の比較(表2)から、昨年は一昨年に比べて施錠時刻がかなり早くなったが、今年は昨年と比べて初めは早くなったが徐々に遅くなっていることが分かる。

	4月	5月	6月	7月	9月	10月	11月	12月	年間平均
H28	21:36	20:38	20:31	20:40	20:13	20:40	20:20	20:25	20:36
H29	21:21	20:25	20:14	20:25	20:20	20:10	20:06	20:22	20:24
H30	21:10	20:22	20:07	20:29	20:13	20:13	20:14	20:25	20:24

- 年休が年間20日付与される教員の、冬季休業中までの年休の取得状況を調べた。(表3)  
平均では、年休を約11日取得できている。また、約7割(53/75人)が10日以上取得しており、年度末までに8割以上(61/75人)以上が10日以上取得すると予想できる。

	10日以上取得	8日以上10日未満	平均取得日数
対象者75人	53人	8人	11.1日

今 後 の 課 題

- 中間報告を含めた統計から、過去5年間で、多忙化解消に向けた業務の効率化や働き方に対する教員の意識変革が大きく前進してきたことが分かる。しかし、昨年までに比べて今年の長時間労働の改善は足踏み状態と言える。更なる改善に向けた対策は難しく、時間割作成の工夫など学校全体の取組とともに、一層の個人の努力が必要である。
- 時間外勤務が、文部科学省が提示した月45時間以内になるように多忙化解消に取り組んでいきたい。月45時間は、月22.5日で換算して1日平均2時間以内ということであり、言い換えると、平均19時退校ということである。20時退校が日常化している教員にとっては、より仕事の効率化が求められる。今後も働き方について分析を続け、教員が目標と見通しをもって業務を遂行していけるようにしていきたい。

### 3 評議員の皆様からのご意見、ご感想、質疑応答

#### <A評議員>

- ・他校でも言っているが、子どもは元気が1番だ。子どもに元気があるのか、表情がいつもと同じか、目をそらすかなど、注意して頂き、宝である子どもの成長を支援してほしい。

#### <B評議員>

- ・報告を聞いて基礎学力を高めることに先生方が工夫し一生懸命取り組んでいることは伝わった。
- ・名聾の課題として、「基礎学力の向上に努めるとともに、生活に生きる学力となるようにする」と挙げているが、今回取り組んだことは「生活に生きる学力」に結びついているのか。生活に般化できているか、どういところで活用できるかを考えた指導が必要である。新学指導要領で示されているように、各教科の授業で教科横断的な取組を積極的にしてほしい。今後は基礎学力を伸ばしたことが生徒の生活にどう般化したかという発表が聞きたい。
- ・理科で歴史的なことに触れているのはよかった。社会では、歴史上の人物の立場に立ったつもりで思考したり、数学では、計算や理論からではなく、ボールをどんな角度で投げるとどれだけ飛ぶのかなど、日常生活に結びつけて考えたりすると学習が楽しいと感じられるような授業ができる。
- ・愛媛大学の加藤哲則先生に、コミュニケーションモードと国語力・語彙力には相関関係がないと聞いた。言語力を上げるには、語彙力と文の体系的な知識が必要である。

#### <C評議員>

- ・漢字テスト（読字力テスト）は、不合格になってもあきらめずに合格をめざして取り組んでいてよい。
- ・いじめの問題は名古屋聾学校では聞いたことはないが、他校ではあるのではないかと思う。全国的にも話題になっている親の虐待などについて、名聾でも調査していただき報告を聞きたい。

#### <D評議員>

- ・学校の勉強に意味があるのかと言う生徒がいるとのことだが、自分の経験上、学校の勉強ができない人は会社に入ってから苦労する。会社に入ってから勉強、学びは必要である上、会社は学校のように丁寧な指導はない。教科書もなく、勉強の方法も自分で見つけなければならず、学校での学びがなければ、仕事はできない。社会に出ないと分からないこともあるが、学校にいる間に丁寧に学ぶことが大切である。
- ・数学の実践において、生徒が他の生徒に伝わりやすいように配慮して説明するようになったとあったが、会社に入っても必要なことである。教科を超えて是非情報共有して実践してほしい。
- ・会社の中でもいじめのような悩み事、困り事はあり、管理職がどのように把握するのかが課題である。発見が遅れると退職につながってしまう。20代の社員が自ら管理職に相談に来ることはないと言われたことがある。管理職が吸い出して把握してほしい。またSOSを出せる環境を作っていくことも重要である。

#### <E評議員>

《質問》多様なニーズに応じた教育課程とはどのような意味か。

→教務部：重複学級では実態に合わせて2コース展開している。

学習集団によっては、実態に応じて、または安全性の確保などを考慮し、TT指導を取り入れるなどしている。

《質問》語彙を増やすと言語力は高まるのか

→国語：語彙だけでは言語力向上は難しい。ボトムアップ（語句《語彙》から文または文章へのアプローチ）、トップダウン（文脈の中での語彙《語句》の理解）をバランスよく学習していくことが大切であると考えている。

英語：最低限中学校で学習する単語を覚えていないと、高校の英語の学習は難しい。英単語のベースアップ、英語力の向上を目的に単語のテストに取り組んでいる。

- ・先生方が生徒のために一生懸命授業改善をして取り組んでいることが伝わった。
- ・先生方の実践はよく分かったが、生徒に先生の意図が伝わっていない気がする。今回の報告でも、聴覚障害の子どもとのコミュニケーション手段である手話について全く触れられていない。手話についても研究しないといけないと思う。
- ・勉強嫌いな生徒もいるが、いろんなことが分かる体験を通して、楽しいと感じることができ、次はどのようなかなどの意欲を育てるような授業をお願いしたい。